

序章

風土論からの接近

第1節 問題の設定

西アジア地域の政治、経済、社会・文化の諸問題に接近するために、これまで様々な議論がなされてきた。特に1979年のイラン革命は、イラン研究において従来行なわれてきたアプローチのうち、何を継承し何を反省すべきかという点について、深刻な反省を促すものであった。例えば、イラン社会におけるシーア派イスラームの独特のあり方にもっと注目しなければならないといった主張は、革命直後からなされてきた。特に革命前にアメリカを中心に行なわれていた各種の社会科学的調査は、イラン社会の抱えていた本質的な病巣を摘出できなかったとして厳しい批判を浴びた⁽¹⁾。だがその一方で、イラン革命の原因の解明は宗教的な側面からのみでは不十分であることもまた明らかであり、イラン社会における固有の論理の発見と解明こそは現在最も必要とされている焦眉の課題であるといえよう⁽²⁾。

このような認識に立ちつつ「イラン社会の固有の論理」にアプローチしようとする一つの試みとして、本書はイラン社会の自然環境との関わり、空間的・風土的な特質、あるいはイランの文化・社会のエコロジカルな条件などに関心を向け、イランにおける中央と地方の関係を制度的な観点をも導入しつつ分析し、またイランとの比較においてエジプトの事例を考察しようとするものである。

イランに限らず中央—地方関係というときに、一般に中心と周辺の関係、

都市と農村の関係、首都への一極集中の問題、主要都市の立地と空間的ネットワークの問題、一国内における地方的な偏差の問題、民族的あるいはエスニックな問題(群)、言語社会的、言語教育政策あるいは言語地理学的な問題、人間と生活を包み込む生態的地域圏の形成の問題、風土的な連続と非連続をめぐる問題、そしてこれらの諸問題に通底する国家の地理的・空間的支配構造の問題などが重層的に関わりあっていると見える。これらの広範かつ複雑に絡まりあう問題群について、できるだけ認識上の共通の枠組みを持ち、そのうえでイランおよびエジプトの国家と社会に対する多様なアプローチを模索しようというのが本書の目的である。

我々がイランを対象として地域研究を行なおうとする場合に、すぐに直面する困難の一つは、入手可能な情報がテヘランからの情報、あるいはテヘランに関する情報に偏してしまうということである。テヘランはある意味でイランのなかの例外的存在であり、少なくともテヘランにおいて、テヘラン以外の地方的な都市あるいは農村部の現状に関する情報が極端に少ないのは事実である。その意味で情報のレベルでは一極集中が案外と実現していないという側面も指摘できる。そこで地域研究者としては、やがて一地方を対象に選び、自らその地方に出掛けていくということになるのである。ところがいったんその地方に入ってしまうと、今度はテヘランにおいてならばある程度接することのできた全国レベルでの情報が極端に限られてしまい、一挙に地方的な状況の中に巻き込まれてしまう。

このようにして、イランの一地域の問題を一国レベルとの比較で考察しようとする、途端にその一地方と中央との関係あるいは距離が掴み難くなってしまうというジレンマが常に存在する⁽³⁾。

それではイランの地方に関する情報は、あくまでも我々のイラン認識にとって第二義的な重要性しか持ちえないのだろうか。いや政治的側面、経済的側面、あるいは社会的側面のいずれにおいても、イランの現状をできるだけバランスよく把握するためには、むしろ地方的な情報をいかに取り入れるかという問題こそ最も肝要であるとすら言いうるだろう。イランは中東諸国

のなかでも特に地方色が「豊か」とされるとされるが、このことは同時に「地方的」な拡散力の強さをも意味している。それゆえテヘラン中央政府にとっては現在でもなお地方の問題は常に最大の「国内問題」の一つであると同時に、それは絶えずイラン政府の「国際関係」における方向性を根底において規定しているのである。一方エジプトは従来イランと対照的にその中央集権的、一極集中的な側面のみが強調されてきたが、近年になって様々な立場からその見直しが主張されている⁽⁴⁾。

そこで本書においては、我々がイランという広大な政治的、経済的、社会的空間への接近を試みようとするとき、常にその空間的・風土的な多様性と構造性を意識しないでは済まされないという自覚を出発点として、様々な方法をとるイラン研究者のあいだでこの問題に関して可能なかぎりコンセンサスを図るという方向をとった。読者は各執筆者により各様に展開される論考の根底に、イラン国家における中央と地方の問題、そしてそこから逆に照射されるイラン社会の歴史的 성격の問題への共通の関心を読み取ることができるとであろう。

第2節 日本における風土論の展開

イランのみならず中東世界を風土論的に位置づけようとする試みは、梅棹忠夫の議論⁽⁵⁾以来何度かなされてきた。だが日本における風土論の系譜は、周知のようにその遙か以前に遡ることが可能である。ここではまず南博の『日本人論』⁽⁶⁾における整理などを手掛かりにして日本における風土論の展開を一瞥しておこう。日本における風土論の嚆矢としては、一般に志賀重昂著『日本風景論』⁽⁷⁾と内村鑑三『地理学考』⁽⁸⁾があげられる。この両者のあいだには「国粹保存主義」と「平和主義・国際主義」の立場の違いが鮮明に現れているが⁽⁹⁾、ともにそれ以降の「島国根性論」の先駆となるものでもあった。

日本における風土論の次の画期は、和辻哲郎『風土—人間学的考察—』⁽¹⁰⁾で

あった。この書の冒頭で和辻は「人間存在の構造契機としての風土性を明らかにする」としており、また「風土は歴史的風土であるがゆえに、風土の類型は同時に歴史の類型である」（傍点原文）と言っている。このような主体的な人間と自然環境の歴史的な相互の関係の類型論としての風土論は、様々な立場からの批判を受けながらも現在に至るまで強い影響を与えている。

和辻は同書で「モンスーン、沙漠、牧場」の三つの類型を立て、それぞれについて詳述している。そのうち沙漠について和辻は「単なる砂の海ではなく、「住むものがない、従って何らの生気のない、荒々しい、極度にいやなところ」とし、地理学的な用語としては「雨量の欠乏によって生じた荒漠不毛の土地」を意味しているとする。さらに和辻は「人間の有り方としての沙漠」の議論に進む。そのようなものとしての沙漠の本質は何よりも「乾燥」であり、また「渴き」である。そこからの系として、沙漠の人間の特性は「人と世界との対抗的・闘争的關係」、「人間の全体性への個人の絶対的服従の關係」に帰結するとする。

さらに日本で風土論の議論を戦後において展開したのが、梅棹忠夫『文明の生態史観』であり、またこれに続く様々な立場からの風土論に関する議論であった⁽¹¹⁾。梅棹の議論は、言うまでもなく世界史の空間的再構成(第一地域—第二地域)に関わるものであるが、その発想はアフガニスタン、パキスタン、インド、イランなどの諸国への「探検」調査とその後の東南アジア諸国への学術調査の体験を重要な契機としている。

梅棹の「第二地域」に対する性格づけは以下のようなものである。「旧世界すなわちユーラシアおよび北アフリカをふくむ巨大な陸地の自然の、生態学的構造をかながえてみよう。きわめていちじるしい現象は、全体陸を東北から西南に斜めに横断する巨大な乾燥地帯の存在である。「乾燥地帯は悪魔の巣だ。乾燥地帯のまん中からあらわれてくる人間の集団は、どうしてあれほどはげしい破壊力をしめすことができるのだろうか。「北方では、匈奴、モンゴル、ツングース、南方ではイスラム社会そのものが、暴力の源泉の一つになる」⁽¹²⁾。

このいささか風土決定論的なにおいのある内陸アジア世界の性格規定は、しかしながら単純であるだけにその後も長く（現在でも？）日本人一般のこの地域に対する認識の枠組みを決定づけてきたといえるだろう。そして少なくとも内陸アジア地域の「異質性」に着目して文明論を再構築しようとする試みは梅棹以降においては目立たず、むしろ東南アジア世界との比較がこの領域における議論の中心になってきたように思われる。

これ以降の議論の展開をみると、まず上山春平編の『照葉樹林文化—日本文化の深層—』はシンポジウムの記録であるが、そこでは和辻の議論を「主観的」としつつも批判的に継承し、ケッペンらの業績を援用したより精緻な科学的考察の可能性を模索している。高谷の『新世界秩序を求めて—21世紀への生態史観—』などの一連の論考はその延長線上に位置づけられるが、高谷は生態、風土といった概念にあき足らず、自ら「世界単位」という概念を創出して近代的な国民国家体制に拮抗する新たな世界認識を提唱している。

一方祖父江孝男は『県民性—文化人類学的考察—』において日本人の地域差（県民性、地方性）の問題を文化人類学的な立場から論ずるが、そのなかで「風土」を「その土地の自然条件→資源の状態→生産の様式→生活の様式」と規定し⁽¹³⁾、日本における東西の地域差の問題を、社会経済史的解釈（福武直）と種族史的解釈（岡正雄）とを対比させて紹介している。また玉城哲・旗手勲『風土—大地と人間の歴史—』は「地域生活の総体としての風土」を日本の農地および溜池灌漑施設と労働集約的な農法のなかに読み込み、日本各地の古来の農地開発が世界的にも特殊な発展を遂げたことを主張している。

廣松渉は『生態史観と唯物史観』のなかでマルクス主義的唯物史観の立場から「文明の生態史観」に始まる梅棹らの議論の吸収を試みており、またマルクス自身の唯物史観が「地質学的、山水誌的、その他の諸関係・諸条件」（『ドイツ・イデオロギー』）の議論への展開へ可能性として内包していたことを鏤々説明する。

ところで日本における中央—地方関係ないし都市—農村関係をめぐる研究は、上述のような風景論ないし風土論以外の分野でも様々な方向から行われ

てきたことは言うまでもない。ここでは網羅的な紹介は不可能だが、筆者の眼にとまった限りで典型的な議論のみ一瞥しておこう。柳田国男『都市と農村』⁽¹⁴⁾は古典的なものの一つであるが、この書は昭和初年の時点において都市と農村の問題をどう実践的に把握するかという政策的関心に裏打ちされていた。また大淵英雄は『地方制度と生活意識』⁽¹⁵⁾のなかで鈴木栄太郎と有賀喜左衛門を導きの糸として長野県諏訪市の村落制度の事例を社会学的に考察している。塚本学は『都会と田舎—日本文化外史—』⁽¹⁶⁾で、歴史学の立場から地方文化の問題に接近している。彼は志賀の『日本風景論』にも関心を寄せるが、「国土とその自然についての考察も、強力な国家という観念からの影響をまぬかれなかった」(152ページ)とする。また塚本は『小さな歴史と大きな歴史』⁽¹⁷⁾でも同様の問題について個別具体的な考察を加えている。

以上のように日本を軸とする風土論および中央—地方関係の議論は、国際的な比較を視野に入れつつ様々な立場から永年にわたって重ねられてきた。このような観点はまた国際的な比較の学としての地域研究にも継承され、日本におけるイラン研究のある部分も、その基本的な発想において上述の議論の延長線上に結びつけることが可能である。その顕著な例が、日本人によるイラン研究のなかでも特筆すべき成果をあげている農村研究の分野であろう。

例えば大野盛雄『イラン農民25年のドラマ』を見てみよう。ページを開くと最初に「ヘイラーバード村郭」と題された写真が眼に入る。「一木一草も見られないラフマト山を背景にした荒涼たる風景の中の農村を私は初めて訪ねた。飯場のような村郭に閉じ込められた各家族の家は間口5メートル、奥行3メートルの1部屋だけだった」とのキャプションがつけられている。まるでこれから幕を開ける芝居の舞台写真の趣きである。そして「第1幕」の冒頭は以下のように始まる。「イランの首都テヘランから南に向かう幹線道路は、約1000キロでザーグロス山地のただ中に威容を誇る、ペルシア帝国時代の遺跡ペルセポリスに達する。その東20キロ、茫漠たる平野の中の小さな農村ヘイラーバードを私は初めて訪ねて行った。1964年、今からちょうど25年前のこと、私は39歳だった」。このまるで芝居の書き割りのような書き出し

は、同書全体の舞台設定を決める重要な役割を負っている。もしこのような設定がなければ、ヘイラーバードの物語のリアリティーは半ば以上失われてしまうといっても過言ではないのである。

また岡崎正孝『カナートーイランの地下水路一』⁽¹⁸⁾のなかで、本書との関連で特に興味深いのは、イランにおける「東」と「西」をめぐる議論である。「農業水利上、イランを、ケルマーンに代表される地域と、パーフタラーンに代表される地域の二つに分けることができる。前者を便宜上『東』、後者を『西』と名づけよう」(22ページ)。「灌漑は『東』では、農業成立のための前提条件であるのに対し、『西』では、収量増大の役割を果たしているにすぎない」(24ページ)。ここで岡崎は結局のところ、降水量を指標としてイランをより乾燥した地域とより乾燥していない地域とに二分していることになる。

そしてこの単純な二分法は、同書の通奏低音として結論部分において再び繰り返されている。「カスピ海東南沿岸のゴルガン地方は、乾地農業地帯である。いわゆるパーフタラーンに代表される『西』に属する。……『東』と比べ、地域全体が躍動的であったのは、農民自身が農業経営に積極的に取り組んでいたからであろう」(218～220ページ)。「イランの『東』ではこれまで、農民は農業経営主体でなかったこと、そして、用水生産の当事者となれなかったこと、そこに、『西』との大きな違いがあり、ここに『農地改革』『近代化政策』導入の挫折の原因が求められよう」(223ページ)。「東」と「西」の二分法がはたしてどの程度妥当なものかは別にして、このような問題意識が「便宜上」という域を超えて同書全体を貫く導きの糸としての役割を果たしていることは疑いえない。

上記の2例にみられるように、イランの農村研究の分野において風土的な条件の考察は不可欠の要件として考えられてきたといつてよい。それに加えて近年ではイラン近代史の分野でも地方史に関する関心がとみに高まっており、意欲的な論文が次々と発表されている状況である⁽¹⁹⁾。本書は以上のような研究動向を踏まえ、イラン研究のそれぞれの分野で蓄えられてきた地域性に関する認識と問題意識を互いにすり合わせ、共通の枠組みを模索する一つ

の試みの報告としてまとめられた。

第3節 本書の構成

本書の「まえがき」でも触れたように、我々の研究会は実質2年研究会として運営され、イランおよびエジプトの中央—地方関係の諸相について、各委員が研究テーマを掘り下げてきた。研究会の研究成果である本書は、2年間の研究会における成果に基づいてさらに基本的な概念や訳語の問題などの検討を行ない、最終的な報告として取りまとめたものである。ここで本書を構成する七つの論文の内容を簡単に紹介しておくことにしよう。

まず第1章の鈴木論文は本書全体の総論とすることを意図して書かれたものであり、大きく二つの部分に分かれている。一つは第3節において、イランの六つの主要な地域圏を骨格とした地域的構成モデルの提案を試みている。もう一つは右のような地域的構成モデルをもとにして考えた場合に、イラン国内でも独特のマージナルな位置にあると思われるガズヴィーン市の領域と帰属の問題についての詳細な検討である。この二つの部分が互いに補いあってイランにおける地域的なあり方が浮かび上がるように筆者としては意図している。

以上の議論で前提されているイランの地域的な多様性は、第2章の長沢論文「エジプトの中央集権性—ガマル・ヒムダーン著『エジプトの個性』をめぐって—」との対比においてより明瞭になる。筆者によれば「イランの伝統社会が地方的分散（地方分権）とモザイク的多様性によって特徴づけられるのに対し、エジプトは中央集権性と同質性の国である」とされてきた。筆者はエジプトの知性を代表する「民族主義の地理学者」ガマル・ヒムダーンの「隠遁」知識人としての個人史を振り返り、大著『エジプトの個性』の解読を試みる。「国民的性格」論とは一線を画する「地域的個性」としての「エジプトの個性」はヒムダーンによって「場所の精神」、「立地」、「位置」など

の概念に集約されているが、ここで長沢が目にするのはヒムダーンの主著の初版と改訂版におけるその主張の修正点である。本稿においては多岐にわたる同書の議論のなかから「同質性」→「統一」→「中央集権性」と展開するヒムダーンの論理構成を抽出し、そこに潜むヒムダーンの議論の問題点を剔出している。

第3章の後藤論文は、革命以前の近代イランにおける中央・地方関係と農業制度を歴史的に概観し、同時にマルヴダシトを地方的な事例として取り上げる。筆者は19世紀後半の政治支配の空間的特徴を記述し、この時期に地方においては「農業の商業化」に伴う地主制の進展と地方社会のマイクロコスモスの解体が進行したとする。これに続くレザーシャー期は上記のような中央・地方関係の変容に対応する近代的中央集権化の時代であり、レザーシャーは地主階級を自らの側に取り込みつつ政治的な中央集権化を推進、同時に農業部門をイランの近代化政策の基盤と位置づけて政府による農業開発政策を強力に推進した。1962年以降、国王モハンマド・レザーシャーは王権のよって立つ基盤の旧地主層からブルジョアジー層への転換を図り、農地改革を基軸とする大胆な近代化政策を打ち出した。後藤はこの農地改革が一定の成功を収めたと評価する一方、地主制の解体は時代の趨勢でもあったとする。これ以降革命までの「開発独裁の時代」には農業も国家主導のもとで大きく再編され、生産性至上主義の波のなかで地方は国家に対抗するその実態を急速に喪失した。

第4章の富田論文は、イラン革命後の中央と村落地域の関係について特に政治過程を中心に詳細に論じたものである。革命政権のもとで農地改革問題は極めて複雑な経緯を辿ったが、それはイスラーム法の普遍原理と近代的な地理的・領土的限定との対峙という根本的な問題を孕んでいた。この点は現在のイランの国家体制をどう規定するかという問題とも絡まり、結論は今後に持ち越された。結論部の「シャー時代、農地改革の第3段階として、小規模農地の自作農を切り捨て、生産主義に基づき農業公社とアグリビジネスの設立が強権的になされた」のに対し、「革命後はこれへの批判として小規模農

家の自立経営への検討がなされたものの」、革命後10年を経て再び生産性重視による大規模農場主義、資本主義的農業経営への回帰が生じつつあるとの指摘は暗示的である。

第5章の黒田論文は、今世紀初頭のイランの一地方的運動とされるジャンギャリー運動のイギリス外交資料を用いた再評価を通じて、イランにおける中央-地方関係の歴史的な具体的事例を考察している。19世紀初頭は後藤論文にもあるように中央集権化と中央・地方関係の変容の過渡期に当たっており、ジャンギャリー運動はこの時期のイランにおける国民意識の実態を探るうえでも貴重な事例である。客観的な地理的限定はひとまずおくとして、この運動の理念が内包していたナショナリズムとイスラミズムのあり方はイランの中央・地方関係を考える場合に極めて示唆に富む。同時になぜこの運動が全国的な広がりを持ちえなかったという問題についても、幾つかの推論を試みている。

イランの中央・地方関係を考察する場合に見逃しえないのは民族的な多様性であり、またそれに対する中央政府の政策的対応である。だがこの問題は同時に極めてセンシティブな問題でもある。第6章の縄田論文「イランの言語政策」は、この問題に社会言語学の立場から接近したものであり、前半部で前提条件として「多民族・多言語国家イランの一般言語事情」を紹介的に論じ、しかる後に公用語であるペルシア語に関して社会言語学的・言語構造的見地から考察を加える。第3節以下が「イランの言語政策」についての考究であり、パフラヴィー朝期、イスラーム共和国と分けて論じている。結論として、イランにおいて採用されてきた言語政策はむしろペルシア語の圧倒的な優位性に基づくものとして共通の性格が見て取られるとし、言語の面における少数民族問題はイラン社会において相変わらず内包されているとしている。

イランの地方分権的な性格は、当然のこと豊富な地方誌・史の編纂、発行にも反映されている。長年にわたり地方誌・史を収集してきた第7章の八尾師の論文は、その実態を報告するものである。八尾師は昨年度の成果である

所内資料『イランの中央と地方』において自身の問題関心を若干展開し、その時点でのコレクションの結果を文献目録のかたちで発表したが、本年度はそれに引き続いて対象の範囲を広げ、これらの発行状況についての基本的データの整理・紹介を通じてイランの出版事情に反映した中央・地方関係の一端を論じたものである。ここでの基本的なデータはすべて八尾師が自らの足で集めた独自のものであり、その意味で資料としての価値は非常に高い。

以上各考察のなかで、イランの国家的な特質とその直面している問題の多くが中央—地方問題あるいは都市—農村問題の枠組みの中で捉えることが可能であり、「イスラーム革命」後の現在においてもイランの現状についての考察を行なおうとする場合に、依然として「イラン社会」を構成する地域的な諸社会の動きを追うことが重要であることが確認されたと思う。この研究会においてはイラン国家の地域的・民族的な要素をできるかぎり全体との関連を見失うことなく検討することに努めた。本書はそのとりあえずの報告である。

なお本書では行政区分、地域概念などの翻訳、および地名などについて各章ごとに特に明確な基準を設けていない。

ペルシア語の地名表記に関しては岡崎の試論が存在するが、現在までのところこれはあくまでも試論の段階に止まっている。それはこれらの訳語や表記が統一できるほどに研究者のあいだでコンセンサスが出来上がっていないと同時に、各執筆者の表記がそのまま各委員の地域認識を反映していると考えられるからでもある。

イランの代表的行政区分の本書における一応の共通の訳語は、以下のとおりである。

Ostan=州, Shahrestan=市, Shahr=シャハル, Bakhsh=郡,
Dehestan=地区

〔注〕 _____

(1) 例えばH. Algar, *The Roots of the Islamic Revolution*, Ontario: Open

- Press, 1983. 黒田壽男『イスラームの心』中央公論社, 1980年。
- (2) 革命後の欧米のイラン研究の動向については、とりあえず鈴木均『革命イランをめぐる政治分析の再検討』(伊能武次編『中東における国家と権力構造』アジア経済研究所, 1994年, 113~144ページ)を参照のこと。
 - (3) このような限界の率直な認識は、例えば大野盛雄『イラン日記一疎外と孤独の民衆一』(日本放送出版協会, 1985年)の「あとがき」において語られている。
 - (4) その詳細については第2章を参照。
 - (5) 梅棹忠夫『文明の生態史観』中央公論社, 1967年。
 - (6) 南博『日本人論』岩波書店, 1994年。本書は日本人論に関する該博な文献的サーベイであるが、風土論はそのなかで重要な一領域として扱われている。
 - (7) 志賀重昂『日本風景論』政教社, 1894年。
 - (8) 内村鑑三『地理学考』警醒社書店, 1894年。
 - (9) 内村は志賀の『日本風景論』を評して「我國の風景は人を酔はしむるものなり(細工に過ぎて)、人を高むるの美、即ち自己以上に昇らしむるの美は吾人は汎くこれを万国に求めざるべからず、余輩は信ず志賀氏のこれを言はざりしは彼の文学的技術の然らしめし所ならんと」(傍点原文)と述べ、その立場の違いを明確にしている(『六合雑誌』第168号, 1894年12月15日, 岩波文庫版『日本風景論』所収)。
 - (10) 和辻哲郎『風土—人間学的考察—』岩波書店, 1935年。
 - (11) とりあえず上山春平編『照葉樹林文化—日本文化の深層—』(中央公論社, 1969年), 祖父江孝男『県民性—文化人類学的考察—』(中央公論社, 1971年), 玉城哲・旗手勲『風土—大地と人間の歴史—』(平凡社, 1974年), 廣松渉『生態史観と唯物史観』(ユニテ, 1986年), 三木亘「人間移動のカルチャー—中東の旅から—」(『思想』第616号, 1975年10月), 同「世界史のなかのイスラム世界」(上岡弘二ほか編『イスラム世界の人びと 1 総論』東洋経済新報社, 1984年), オギュスタン・ベルク(篠田勝英訳)『風土の日本—自然と文化の通態—』(築摩書房, 1988年), 高谷好一『新世界秩序を求めて—21世紀への生態史観—』(中央公論社, 1993年), 櫻井進『<半島>の精神史—熊野・資本主義・ナショナリズム—』(新曜社, 1995年)などを参照。
 - (12) 梅棹『文明の生態史観』中公文庫版, 101~103ページ。
 - (13) 祖父江『県民性』63ページ。
 - (14) 柳田国男『都市と農村』朝日新聞社, 1929年, ちくま文庫版全集第29巻所収。
 - (15) 大淵英雄『地方制度と生活意識』慶應通信, 1994年。
 - (16) 塚本学『都会と田舎—日本文化外史—』平凡社, 1991年。なお塚本は郷土史家一志茂樹の言を引いて、柳田の民俗学が「郷土を捨象して民俗学が研究され

ていた」(98ページ)とする。「柳田による民俗学は……地方の自己主張の性格をあまりもたなかった」(100ページ)。

- (17) 塚本学『小さな歴史と大きな歴史』吉川弘文館, 1994年。
- (18) 岡崎正孝『カナートーイランの地下水路一』論創社, 1988年。水をめぐるイランを中心とした西アジアの農業技術の問題については、後藤晃『西アジア農法』について「乾燥地における伝統的農業の技術的適応一」(『地理学評論』第62巻第2号, 1988年) 113~123ページをも参照。
- (19) 鈴木均「日本における発展途上地域研究1986~94・地域編・中東ーイラン」(『アジア経済』第36巻第6・7号<通巻400号記念特集>, 1995年6月, 236~246ページを参照。またこれ以降においても以下のような論文が発表されている。近藤信彰「19世紀シーラーズの名家と地方社会」(『歴史学研究』No. 685, 1996年6月) 13~24ページ。Shohei Komaki, “Khorasan in the Early 19th Century,” *The Journal of Sophia Asian Studies*, No. 13, 1995, pp. 79-108.